

早稲田大学レジリエンス研究所

第9回原子力安全規制・福島復興シンポジウム

「東日本大震災と福島原発事故から9年～バックエンド問題と福島復興を考える～」

令和2年3月7日(土) 13:00～17:00 於:早稲田大学19号館710教室

総括討論(第1部&第2部への討論)

森口 祐一

Twitter @y_morigucci

東京大学大学院工学系研究科・都市工学専攻・教授

国立環境研究所・理事(研究担当)

早稲田大学 ふくしま広野未来創造リサーチセンター・招聘研究員、「1F廃炉の先研究会」副代表

日本学術会議(第24期)連携会員・総合工学委員会原子力安全に関する分科会委員

原発事故による環境汚染調査に関する検討小委員会委員長

防災学術連携体・監事

7度目のシンポジウム参加: 発災3年後から9年後まで

○第3回原子力安全規制・福島復興シンポジウム 東日本大震災・福島原発事故から3年
～原子力安全規制の今後のあり方と福島復興を考える～平成26年3月7日(金)

＜第2部: 3年間で変わったもの、変わらないもの。福島からの報告＞

演題: 復興への途: 避難指示解除に向けた原子力規制委員会検討チームの議論から

○第4回原子力安全規制・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発事故から4年
～原子力安全規制の今後のあり方と福島復興を考える～平成27年3月11日(水)

＜第2部: 福島復興をめぐる～原子力ガバナンスと市民社会～＞

演題: 福島原発事故による放射性物質汚染と環境回復政策のあり方

○第5回原子力安全規制・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発事故から5年
～原子力安全規制の今後のあり方と福島復興を考える～平成28年3月7日(月)

＜第2部: 東日本大震災・原発事故から5年を経た福島復興の現状と課題
～長期的支援のための制度形成を考える～＞

演題: 「際」からみた事故後の環境回復の課題

○第6回原子力安全規制・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発事故から6年
～原子力安全規制の今後のあり方と福島復興を考える～平成29年3月7日(火)

＜第2部: 福島復興のこれから: 福島から日本の地域社会の持続可能な「かたち」を考える＞

演題: 福島の放射能汚染(、事故処理)と地域復興

○第7回原子力安全規制・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発事故から7年
～原子力バックエンド問題と福島復興の今後のあり方を考える～平成30年3月7日(水)

第1部 「フクシマの教訓」をふまえ、原子力バックエンド問題を考える」 討論者

第2部 「福島復興のこれから: 福島から日本の地域社会の持続可能な「かたち」を考える」 討論者

○第8回原子力安全規制・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発事故から8年
～未来世代から原子力バックエンド問題と福島復興を考える～平成31年3月7日(木)

第1部 「未来世代から原子力バックエンド問題などの社会的合意形成が困難な課題を考える」 討論者 2

5年前の第4回シンポで何を考えていたか？

軌道修正の可能性

- 4年間の知見の蓄積：事故由来放射性物質の環境動態の解明は進みつつあり、中長期的な復旧・復興を考えるうえでも有用→しかし、専門家が持つ知見とそれを利用可能な主体（行政、地域住民）のインターフェースがまだ不十分
- 「正しい知識」をパターンリスティックに伝えようとするのが抱える問題への無理解→いわゆる「専門家」間の意識のずれ
- 元に戻してほしいとの願い→除染・早期帰還政策の推進→それ以外の選択肢を含めた生活環境の回復、復興を考える主体はどこか？
- 元通りには戻らないとの認識→ならばどのような将来像を求めるのか？
→除染・早期帰還には限らない対処（長期避難、遠い将来の帰還）
- 取り戻したいものは何か、元の場所でなければ再現できないものか？
地域の価値（社会関係資本？）の継承と地理的位置との切り離しは可能か？
- 加害者としての国、被害者としての地方自治体・住民という構造の中での地域のガバナンスの主体（例：避難地域の「直轄除染」と自治体・住民の距離感）
- 行政、専門家、支援主体の「縦割り」の改善のための場づくり
- 避難元と避難先の両面からの環境回復の支援

• 基調講演(松岡先生)

- 新型コロナウイルス:社会が新しいリスクに対応するのは難しい
- 社会イノベーション しくみをどう変えるか?
- 1Fヘリテージ、地域アート、Arts & Sciences拠点の3本柱
→21世紀の学術のあり方
- 地層処分における技術の問題と社会制度的問題
- NUMOの研究プログラム報告会におけるカルチャーショック

• 第1部:バックエンド問題の難しさを考える(寿楽先生)

- 社会的な正当化、どのように合意を得るか
- 「暫定」的な「最終」処分 →一廃や産廃の「最終」処分では跡地利用可。
End of Waste、「廃」炉のエンドステートの議論。
- STS(科学技術社会論)、市民参加論、リスクガバナンス論
- 西欧近代的な市民社会の永続性の想定→日本で想定可能な永続性は何?

• 第2部:福島復興の9年を考える(坪倉先生)

- 南相馬市立病院に派遣されたのがはじまり:その偶然がなければ?
- 原発事故後の考慮すべき健康問題は多岐にわたる:生活習慣病など
- 帰還が重視され、避難者の避難先での支援が衰退→県外避難者は?
- 福島県産食材を避け続ける消費者をisolateしないほうがよい
- SNSの功罪:「中立」はどちら側からも批判される

第1部のテーマ: バックエンド問題の難しさを考える

- 何が難しいのか: 価値選択の議論と専門知の架橋
- 新型コロナウイルス問題と「難しさ」は全く異質(緊急性)
- 意思決定、合意形成における共通点はあるか
 - 超長期の先送りと短期の先送り
Not in My Back Yard, Not in My Election Year
 - 科学(専門家)と政策との距離感
 - 専門家による社会への情報発信
 - 可逆性(突然の決定)
 - 世代間公平性(重篤化しやすい高齢者への感染拡大防止のための若者の行動制限)
 - 社会的正当化(99%の休校、つくば市のような例外→お上に逆らったように見えるが国会の首相答弁でも正当化されている)

第2部のテーマ：福島復興の9年を考える

➤ 2019年3月という「今」

- 「復興の10年」という区切りへの近さ
- 帰還困難区域の避難指示解除、常磐線の全線開通
- 除染・帰還重視策による歪み
- 新型コロナウイルス問題という全く異質の国難の中で震災・原発事故から9年はどう扱われるのか？（関心のさらなる低下、メディア報道への反発？）

➤ 新型コロナウイルス問題との対比

- リスクコミュニケーション
- 汚染（感染）地と非汚染（感染）地（例：感染流行地域への国内出張禁止）
- リスクを避けるための日常の急な変化による副次的悪影響
- 「公衆」の「衛生」を誰が護るのか？

➤ 復興に向けた「学」「知」の結集には何が必要か？

→21世紀の学術のあり方の実践例として

復興庁における国際教育研究拠点構想の検討

福島浜通り地域の国際教育研究拠点のイメージ

資料2-2

